特115
889

はしがき

本書は有志家の勸めにより公益を圖らんが爲に編輯し發行したものである
甲府正米の足取表を主とし東京正米足取表並に概況を附錄とした
淺學の編者なれば赤誠を罩めて編輯したれど取捨撰擇が當を得て居らぬ節が必ずあろうと思ふ然れど固より小成に安んぜぬ積りなれば益々先輩の教を受けて版を重ぬるに從ひ訂正增補せんことを誓ふ
由來此の種の書籍は米價の高低を知る唯一の方法で米穀營業の指南車として同業者を裨益する多大なるものがあると信ずる
ほんの數頁しかない一小冊子ではあるが之れに依て大に商界に活躍せらる、助ともなれば編者の目的も達せられ愉快これに勝る事は無いであらう

編者しるす

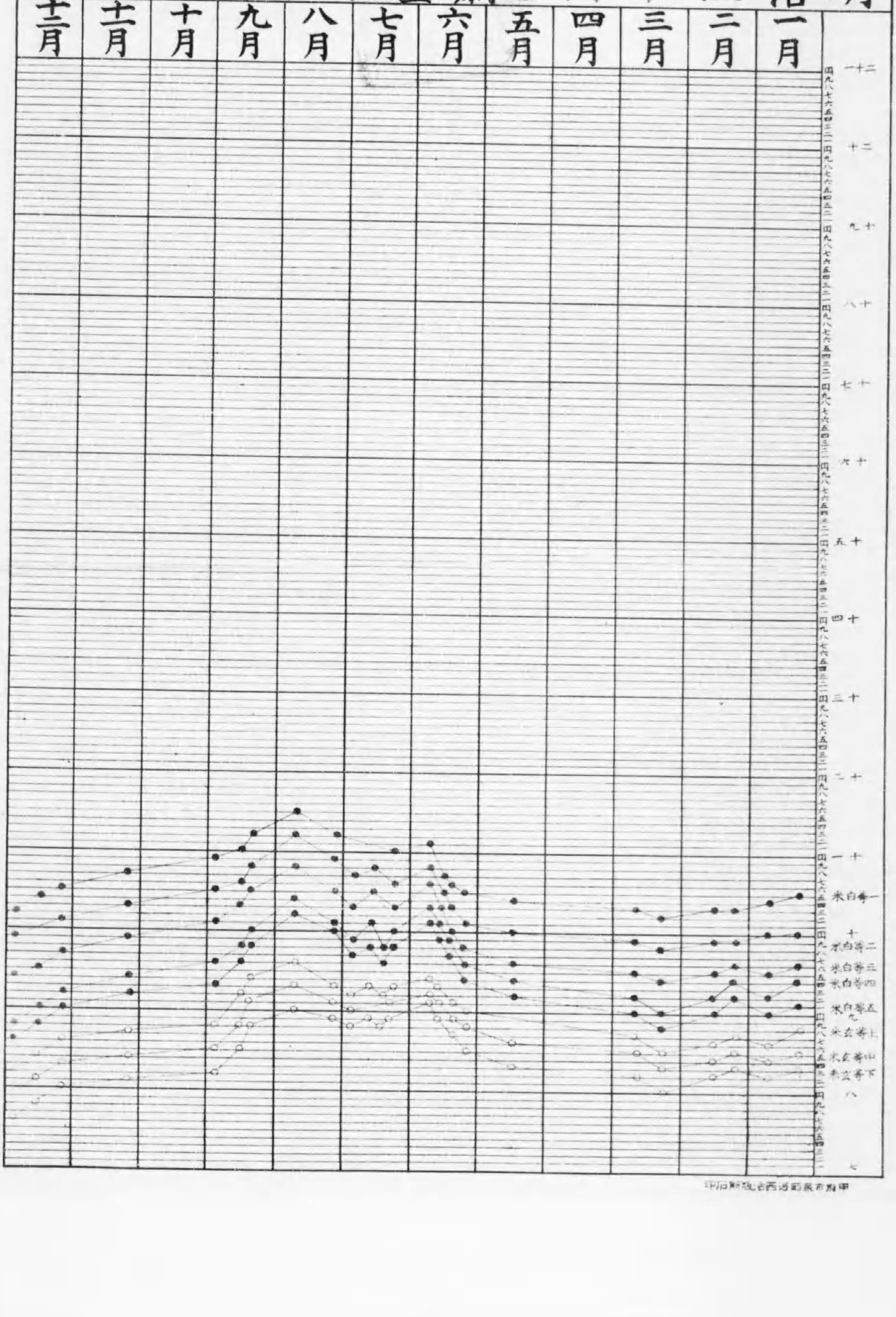
時維大正元年八月貳拾日

大正 1.11.1

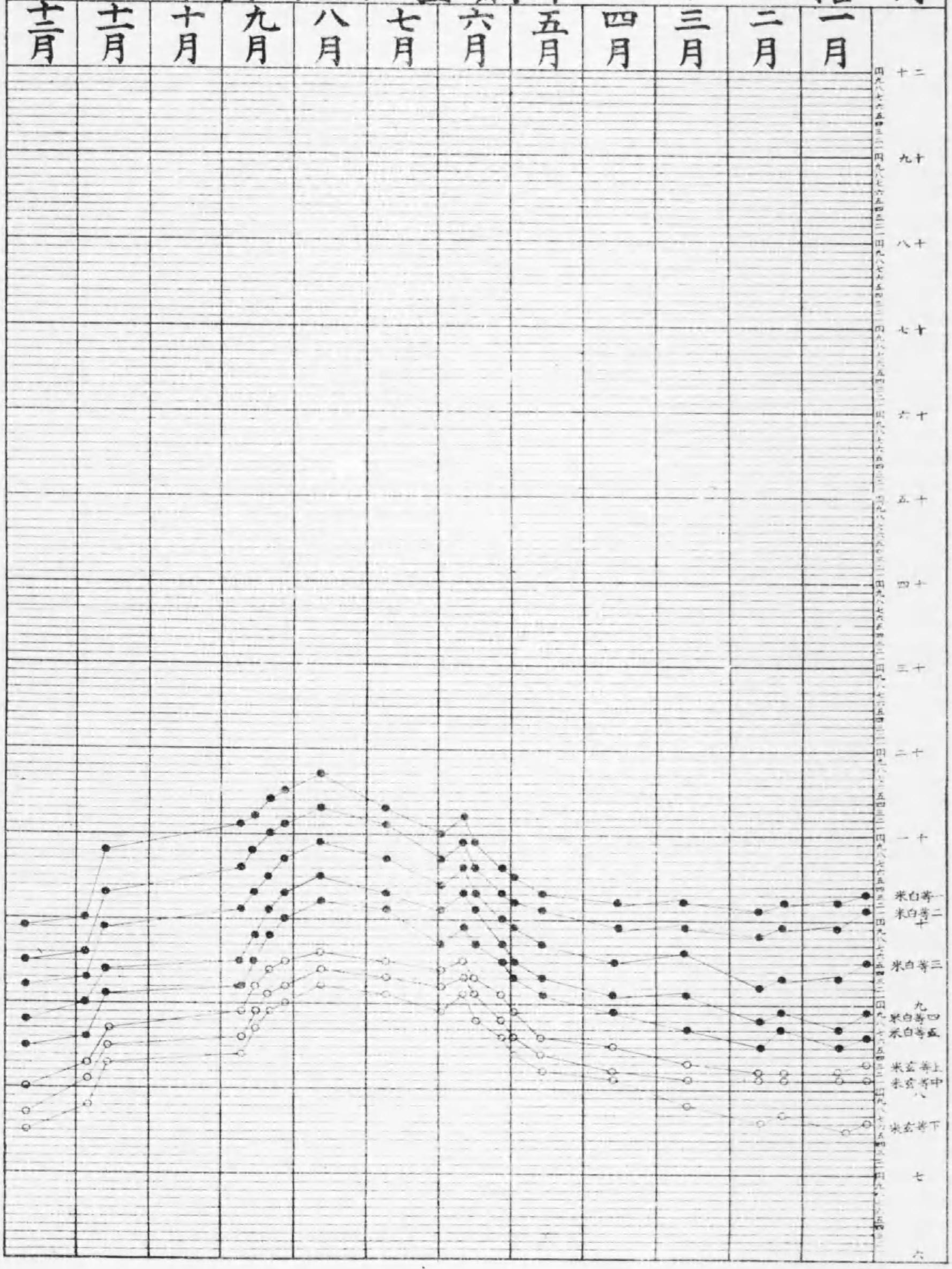
特115
889

特115
889

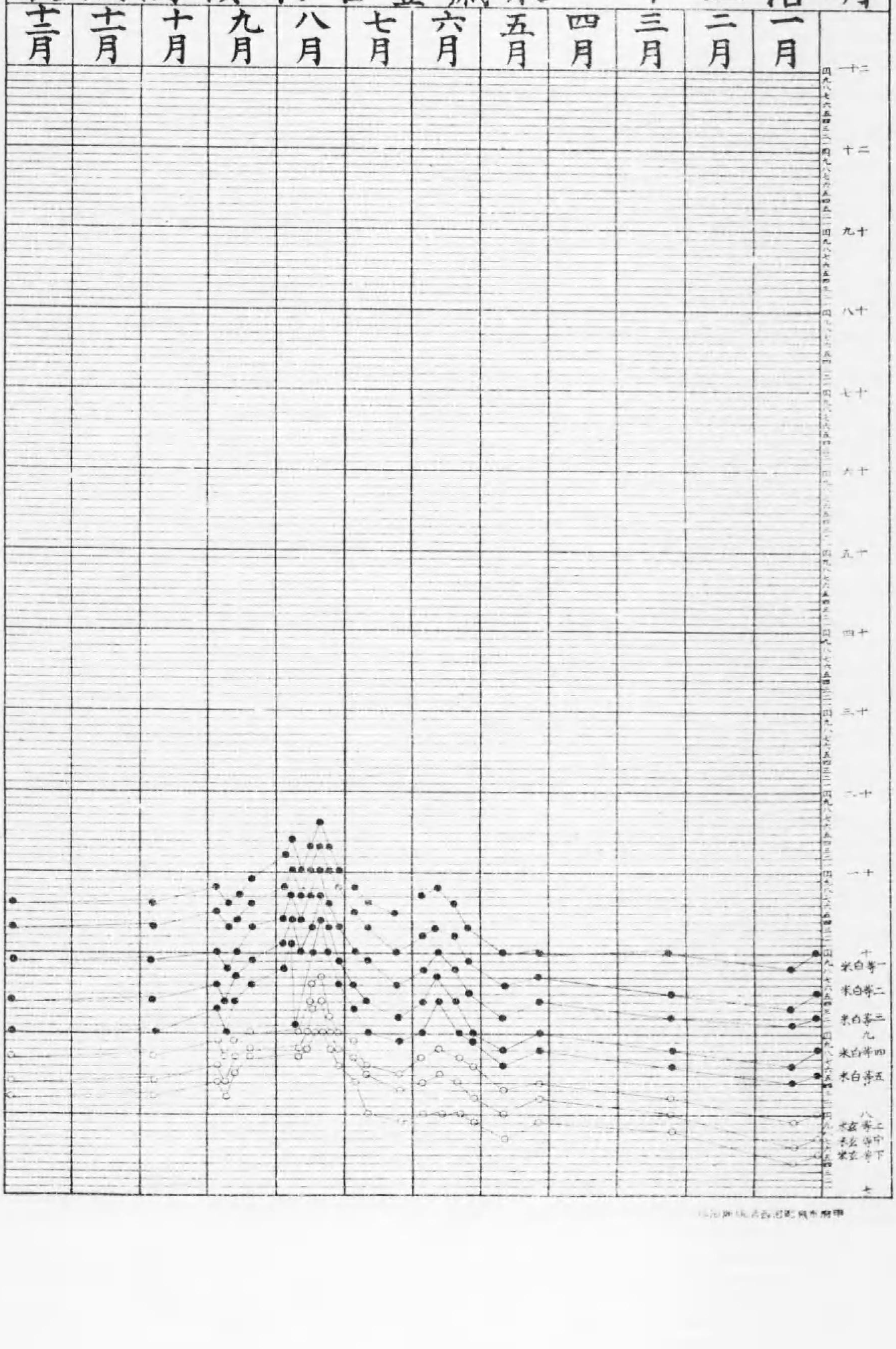
明治二十六巳歲壹石米價高低表



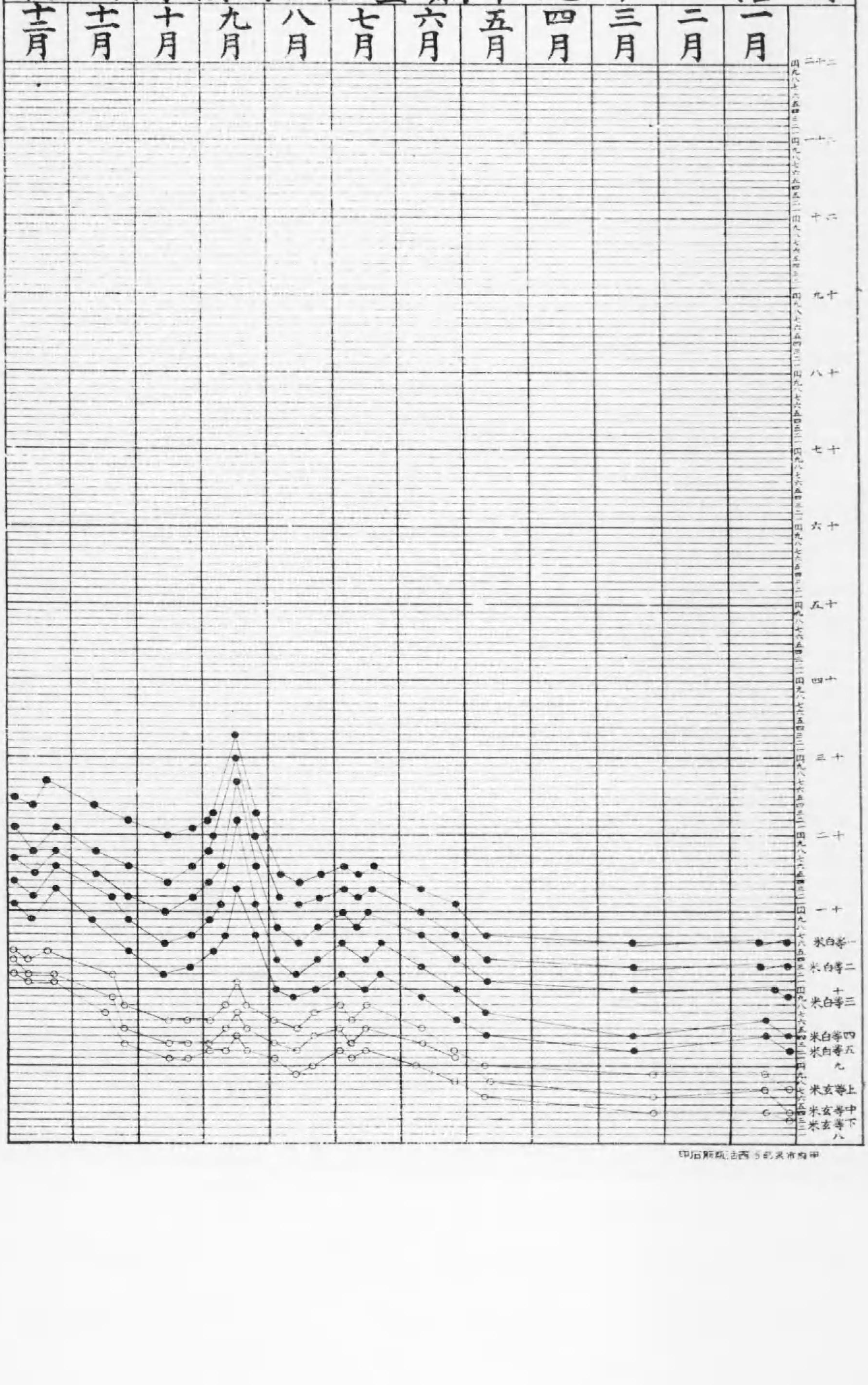
明治二十七年壹歲米石價高低表



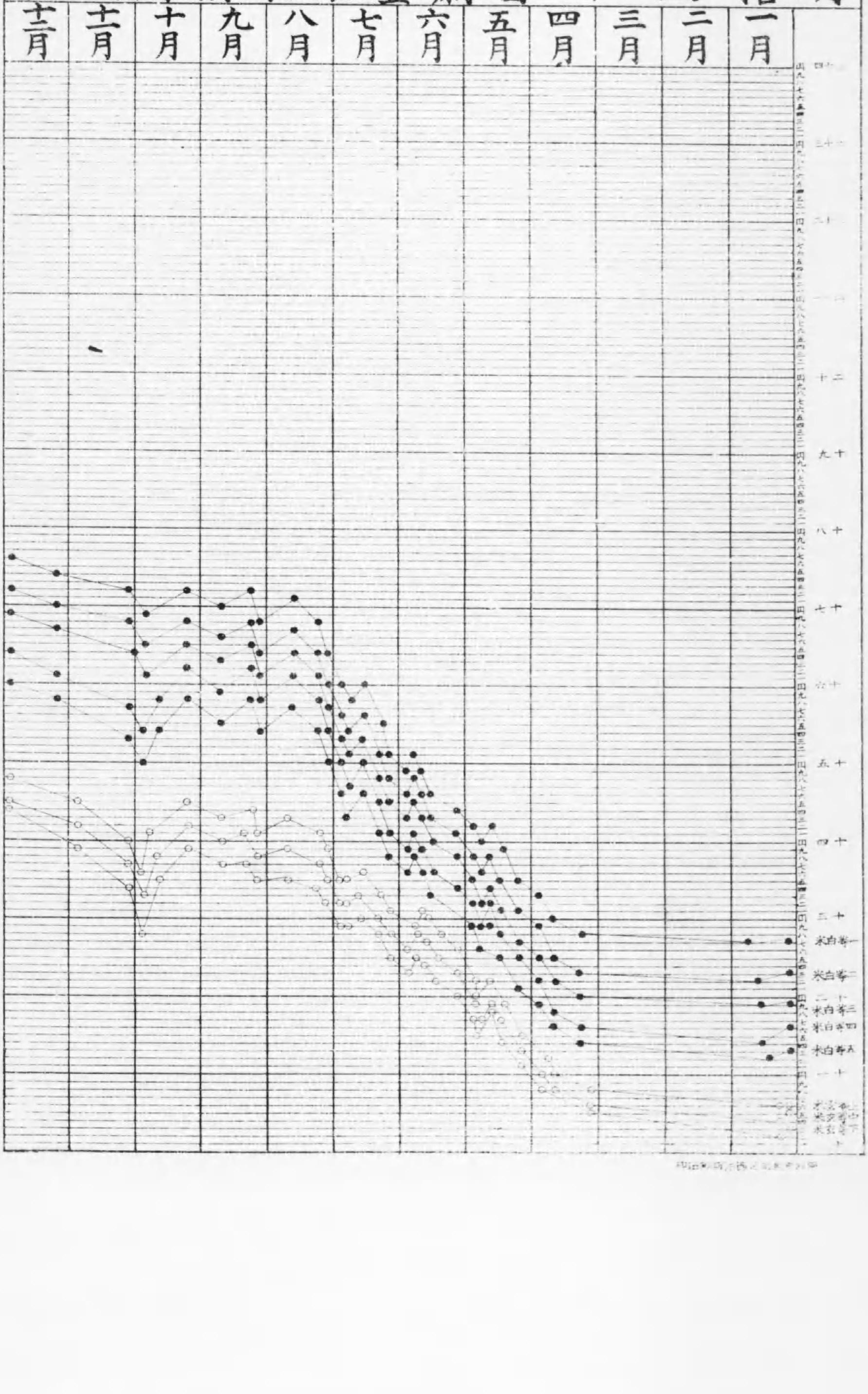
明治二十八年歳壹石米價高低表



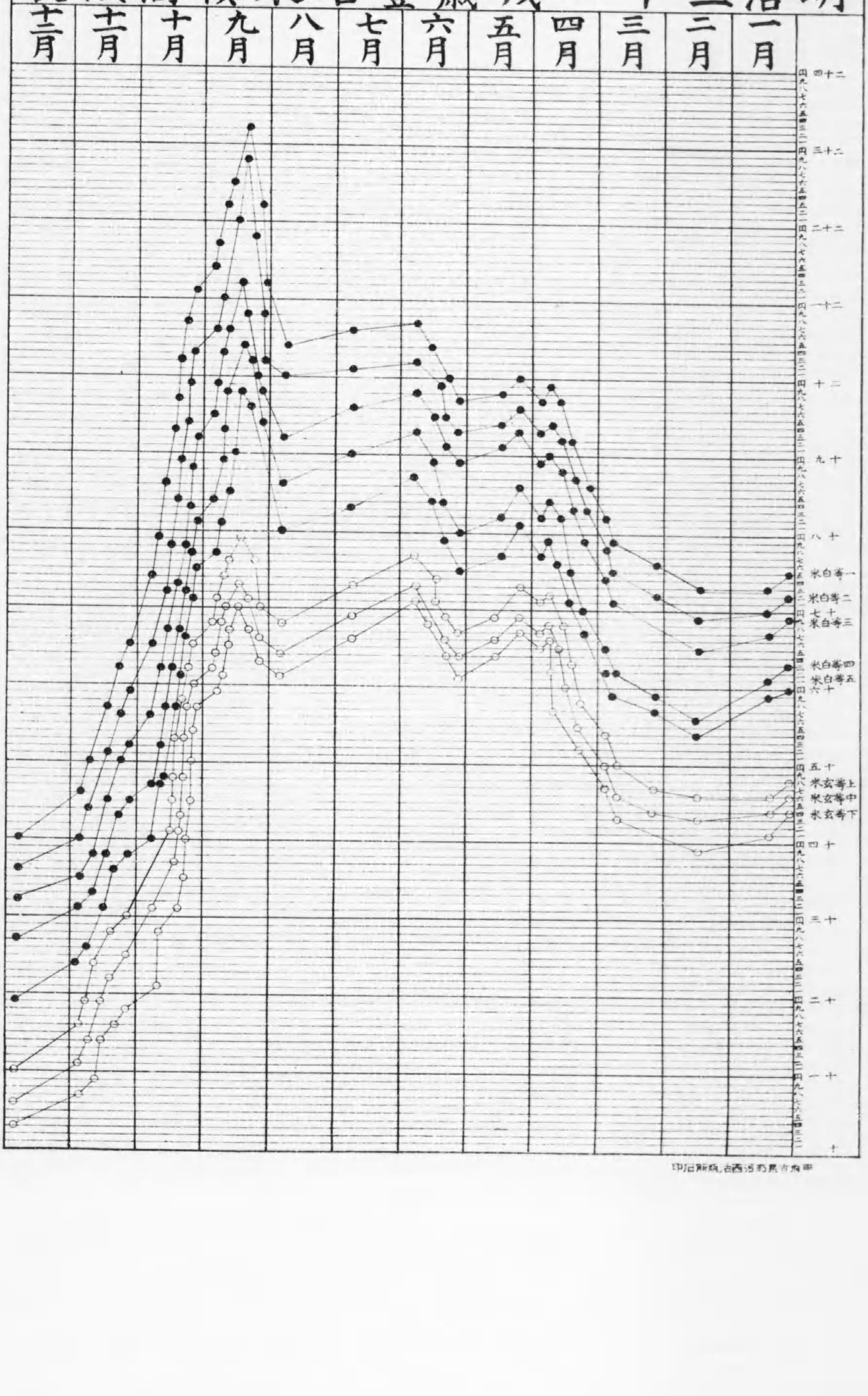
明治二十九申歳壹石米價高低表



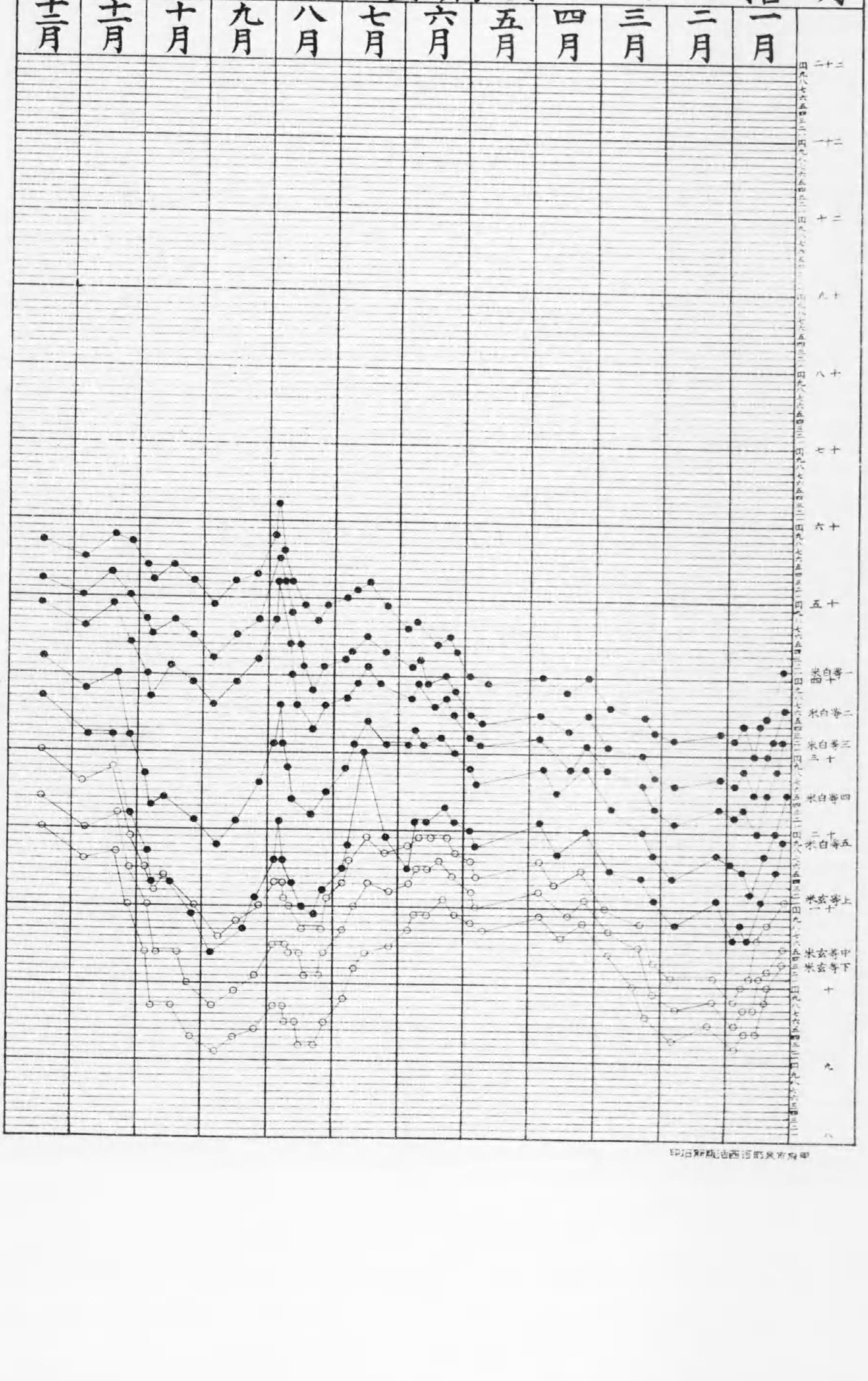
明治十三酉歳壹石米價高低表



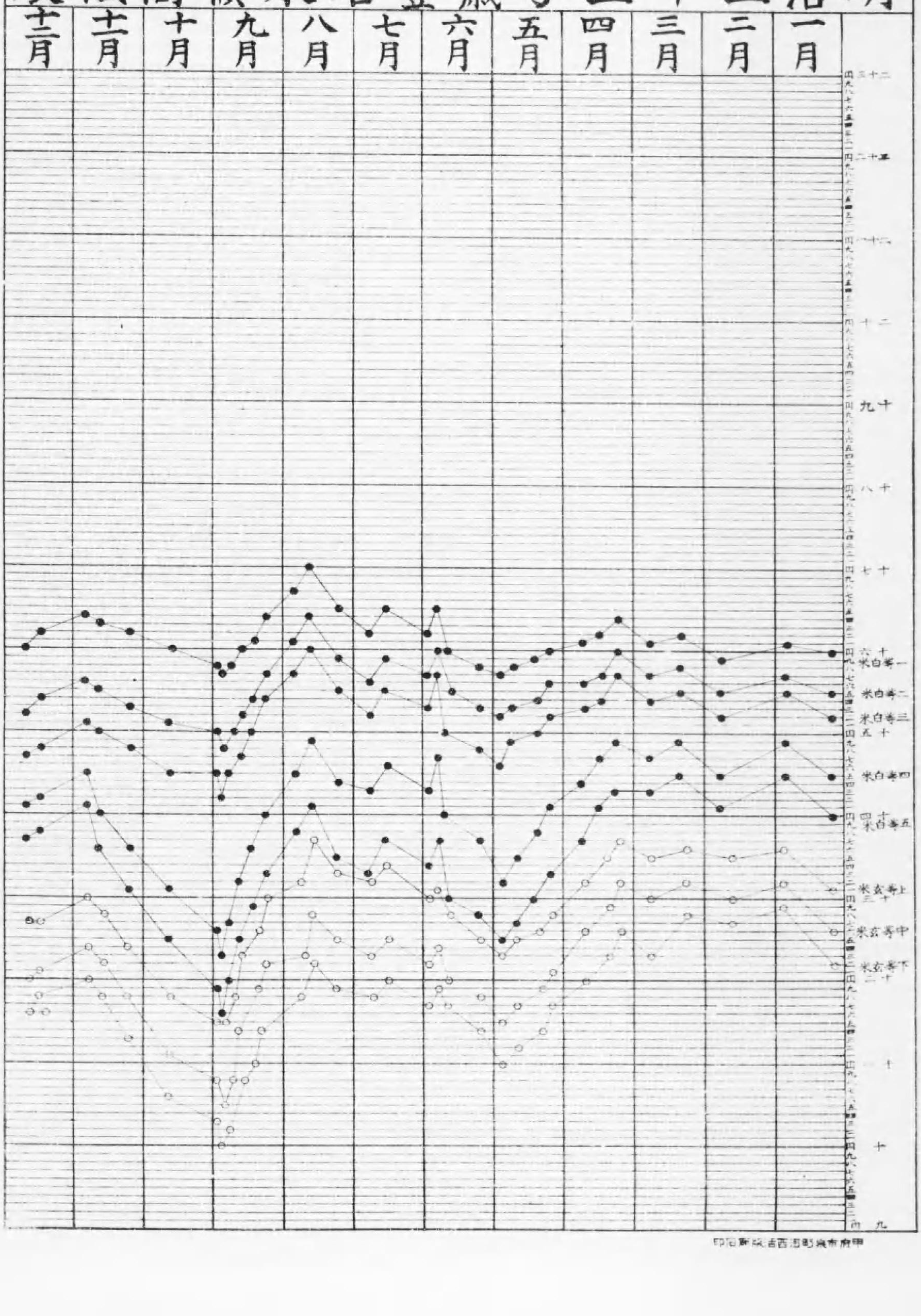
明治三十一戊歳壹石米價高低表



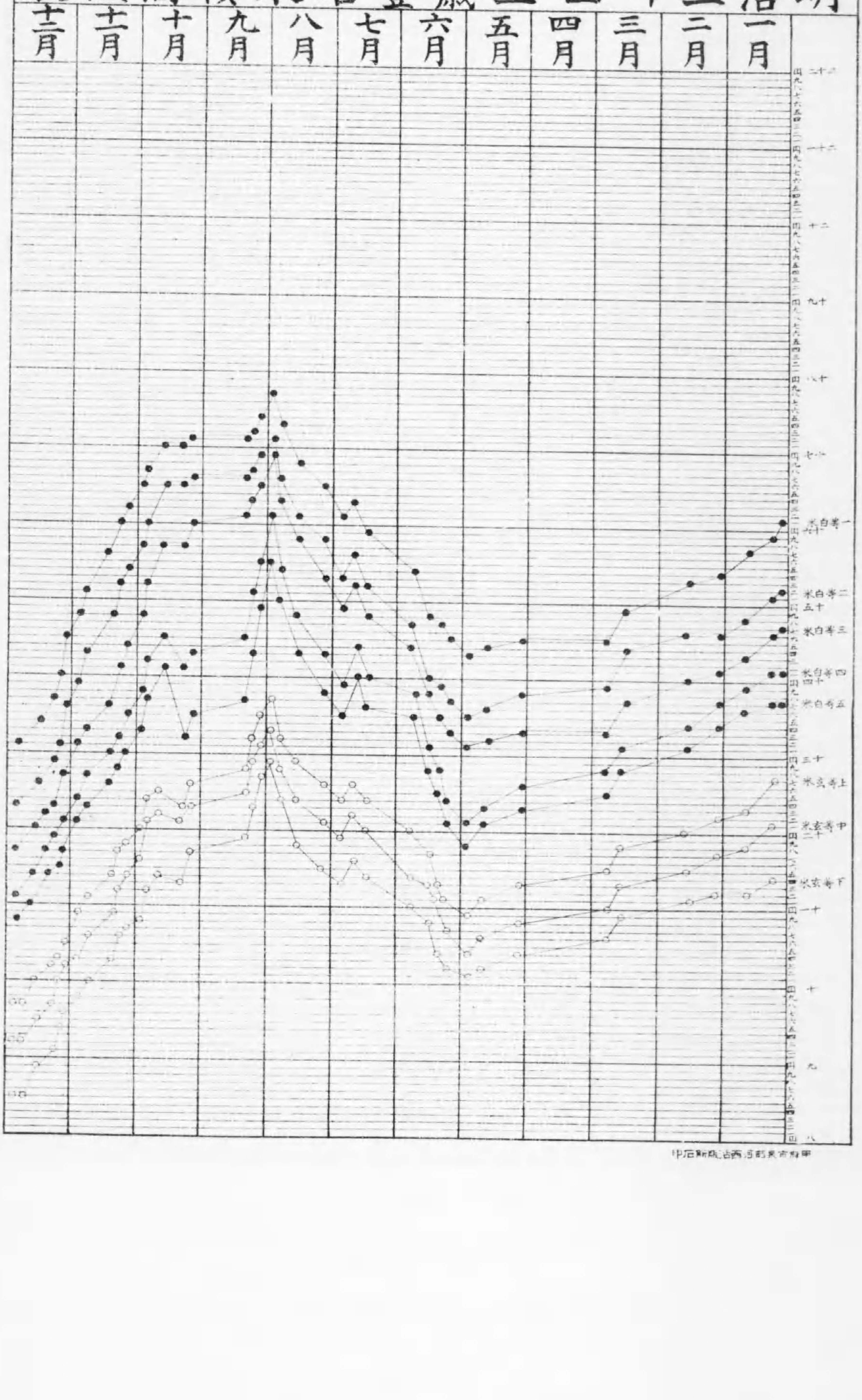
明治三十二亥歳壹石米價高低表



明治三十三子歳壹石米價高低表

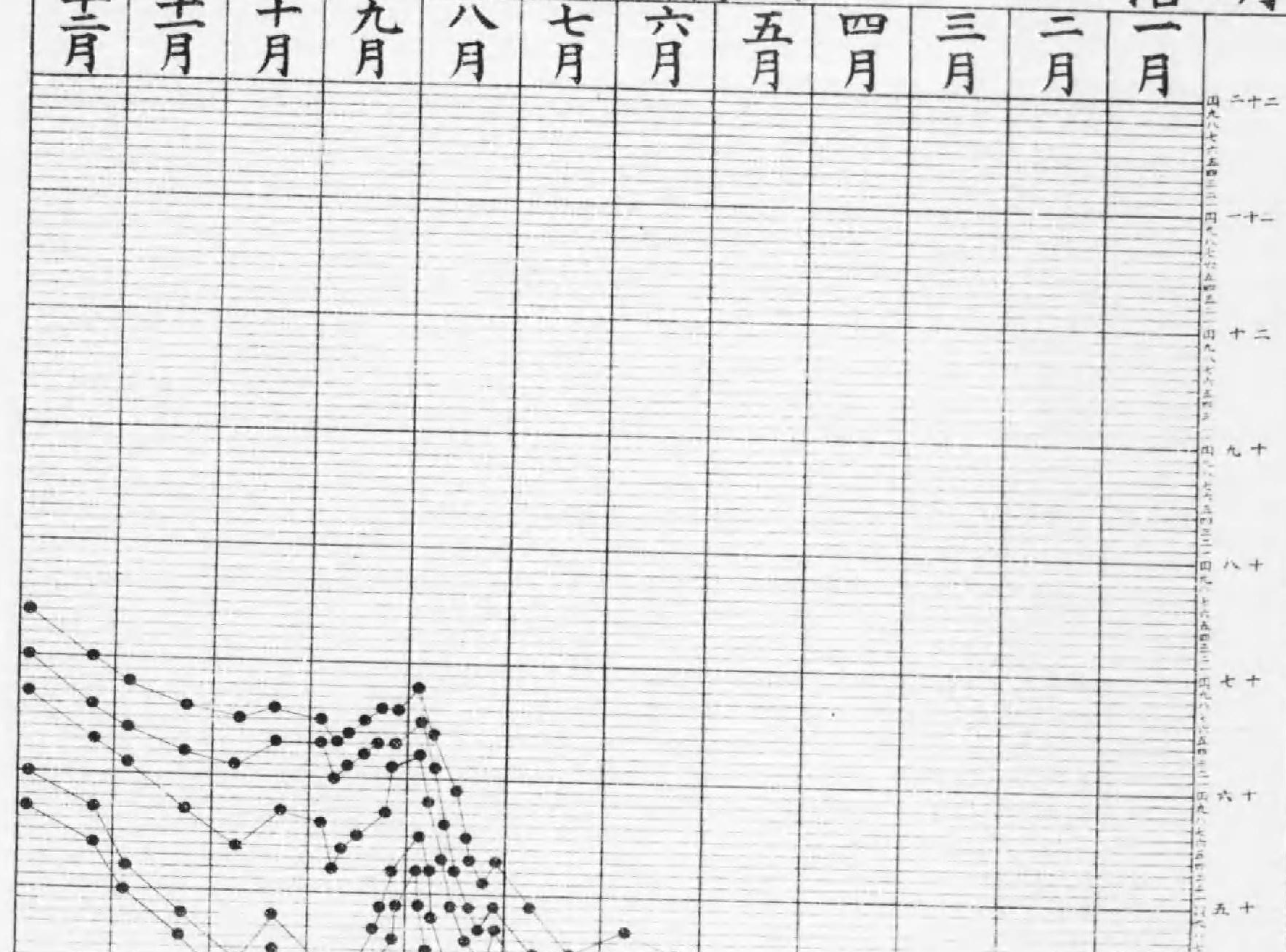


明治三十四丑歳壹石米價高低表

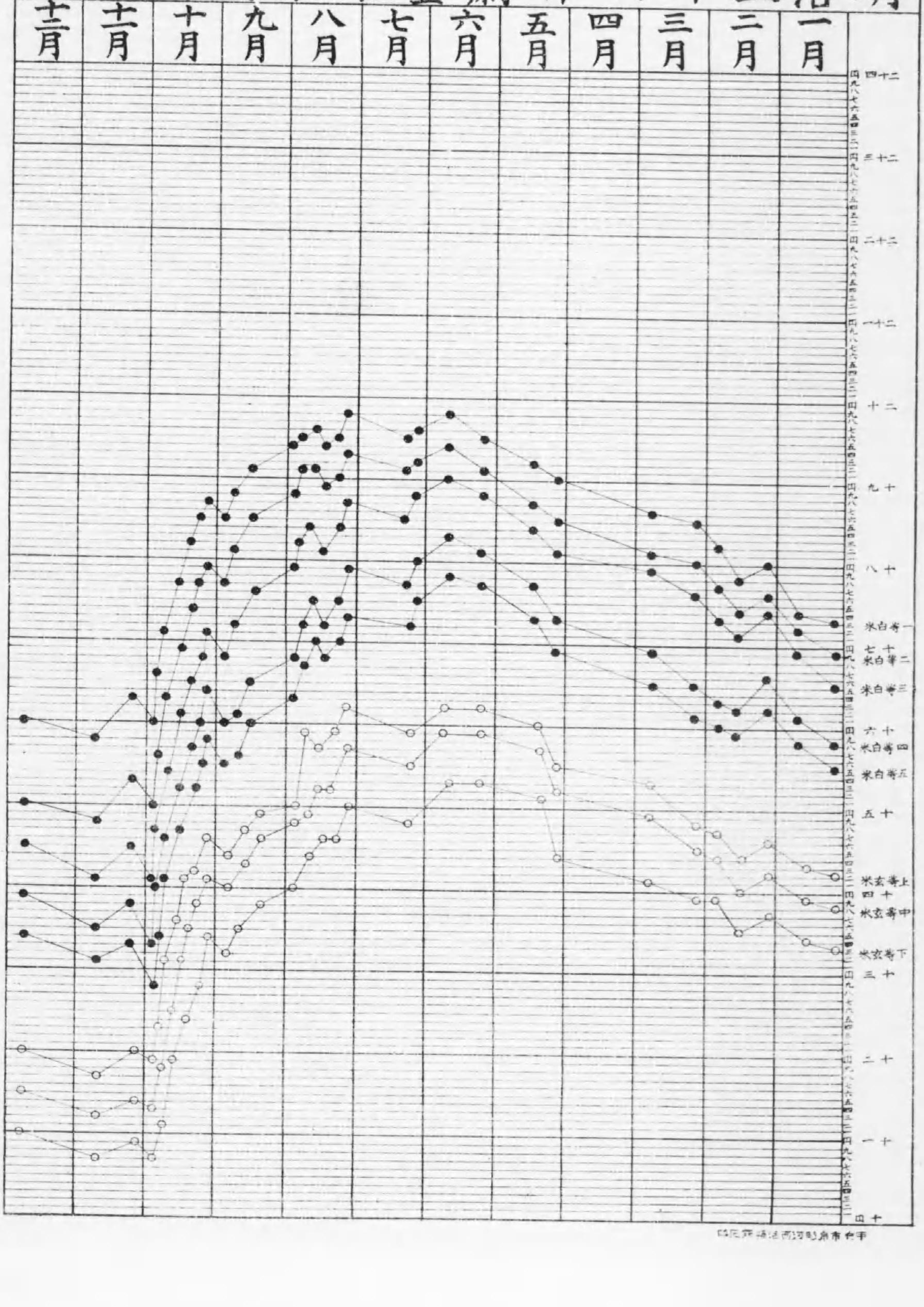


甲府市東青沼町西頭新石印

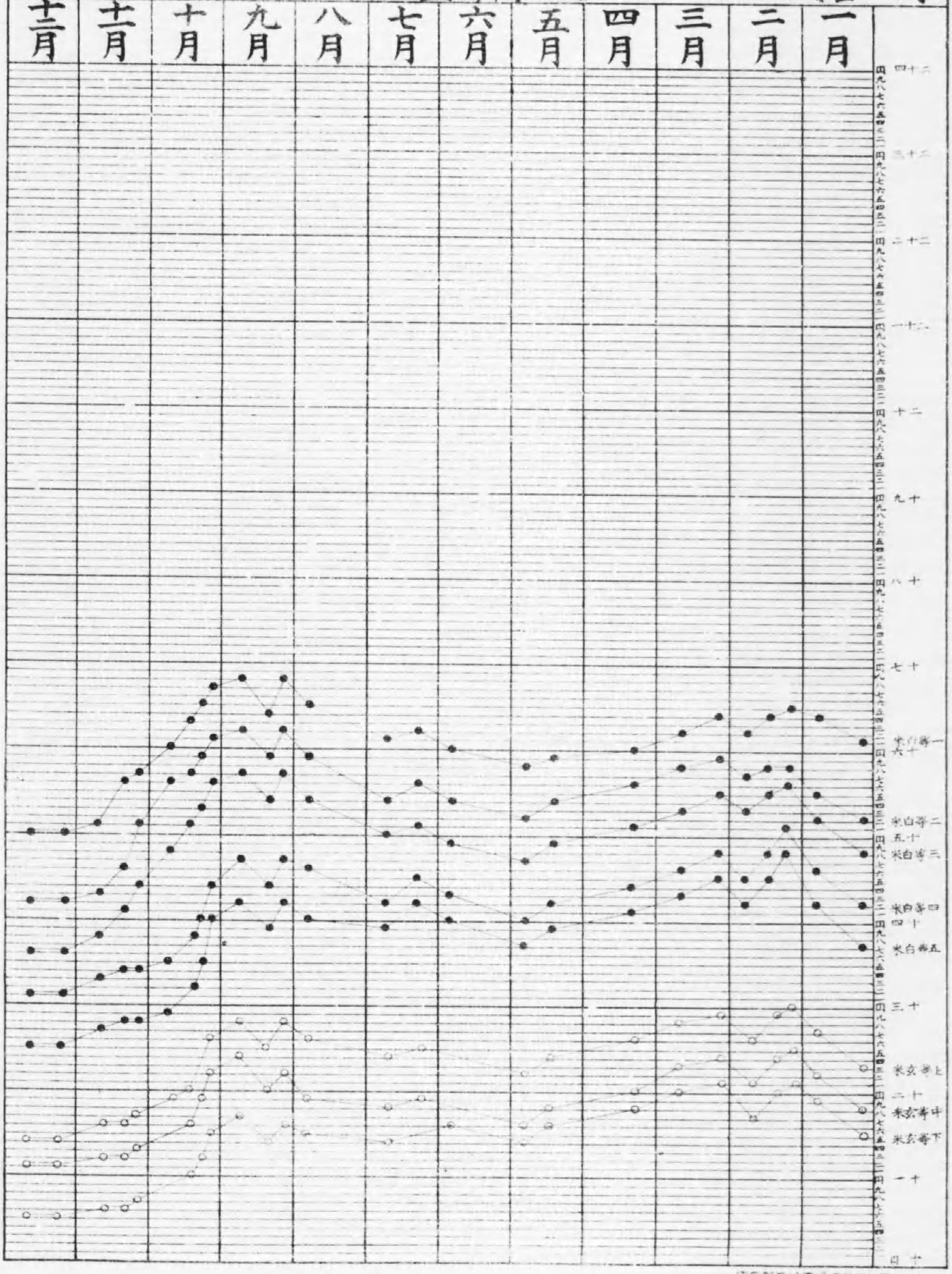
明治三十五 寅歳壹石米價高低表



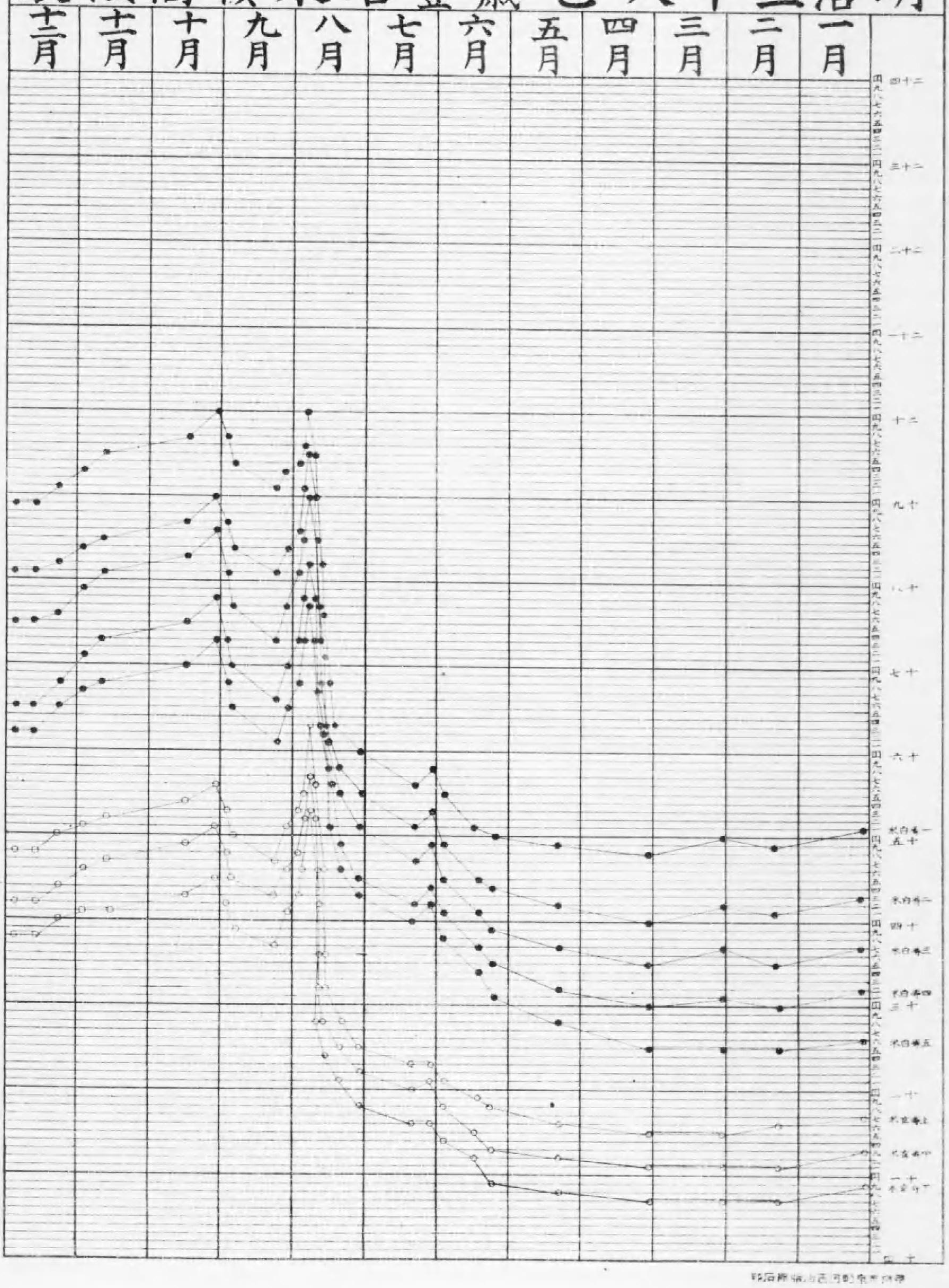
明治三十六卯歲壹石米價高低表



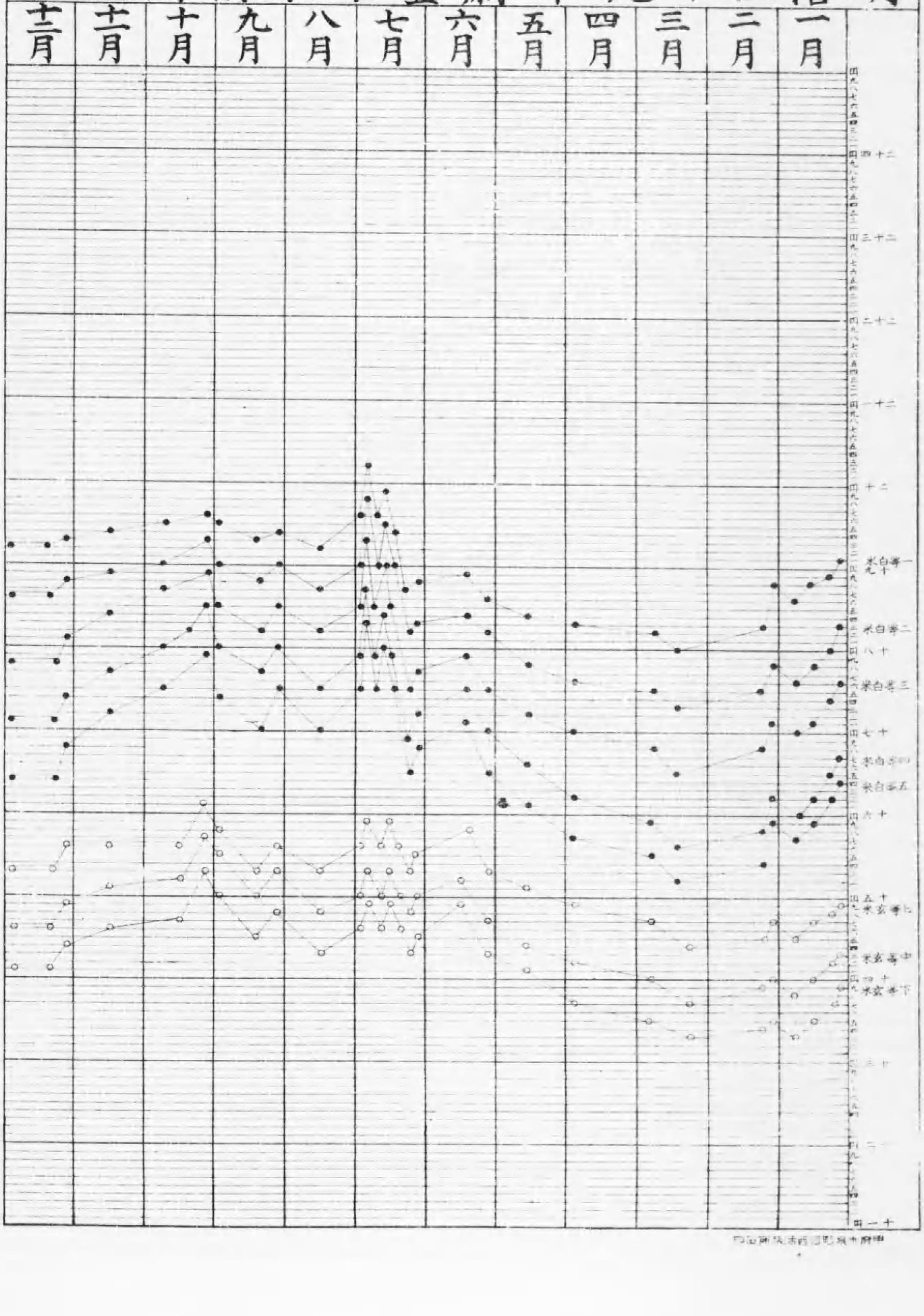
明治三十七辰歲壹石米價高低表



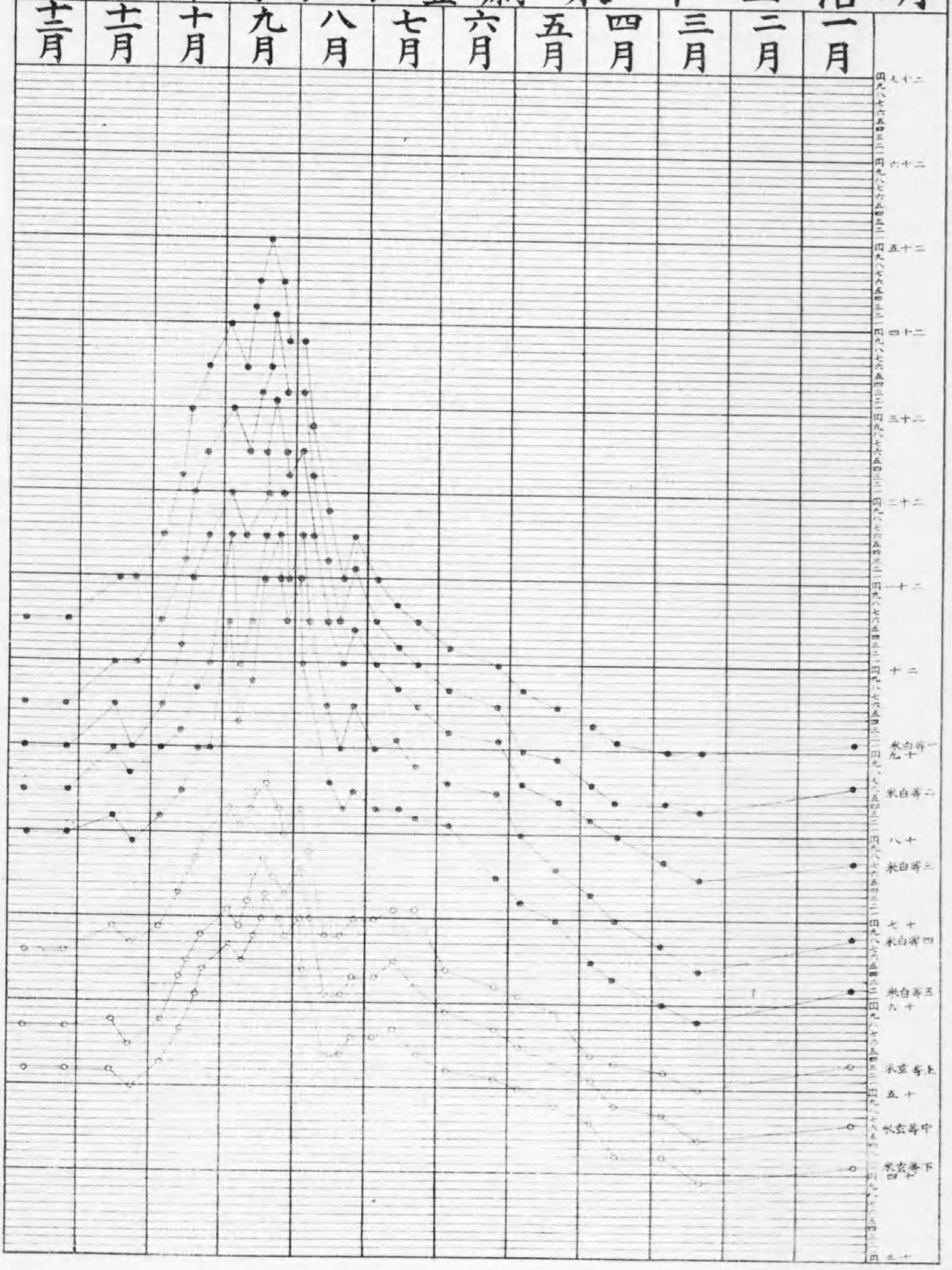
明治三十八巳歳壹石米價高低表



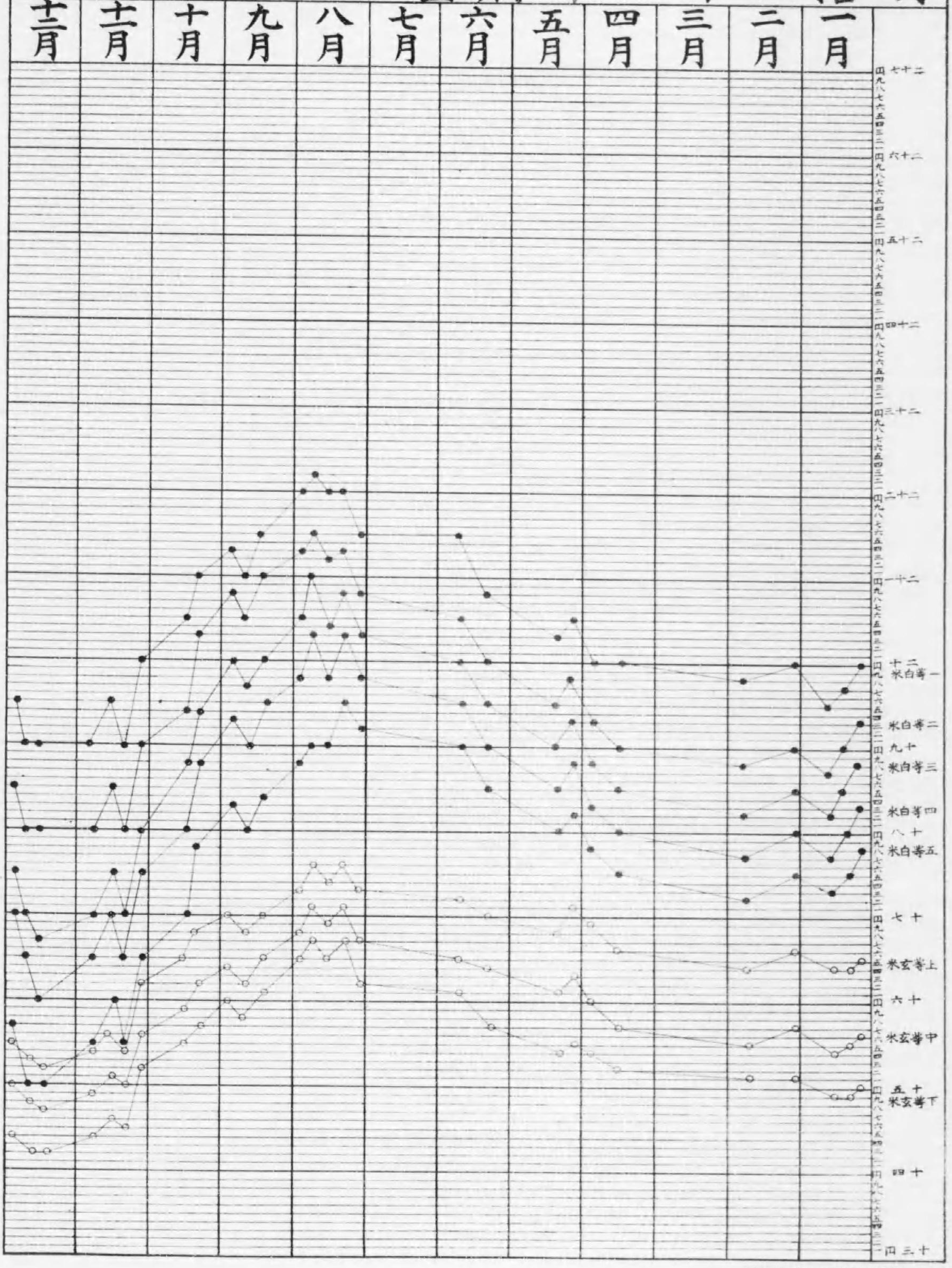
明治三十九年歳壹石米價高低表



明治四十未歳壹石米價高低表

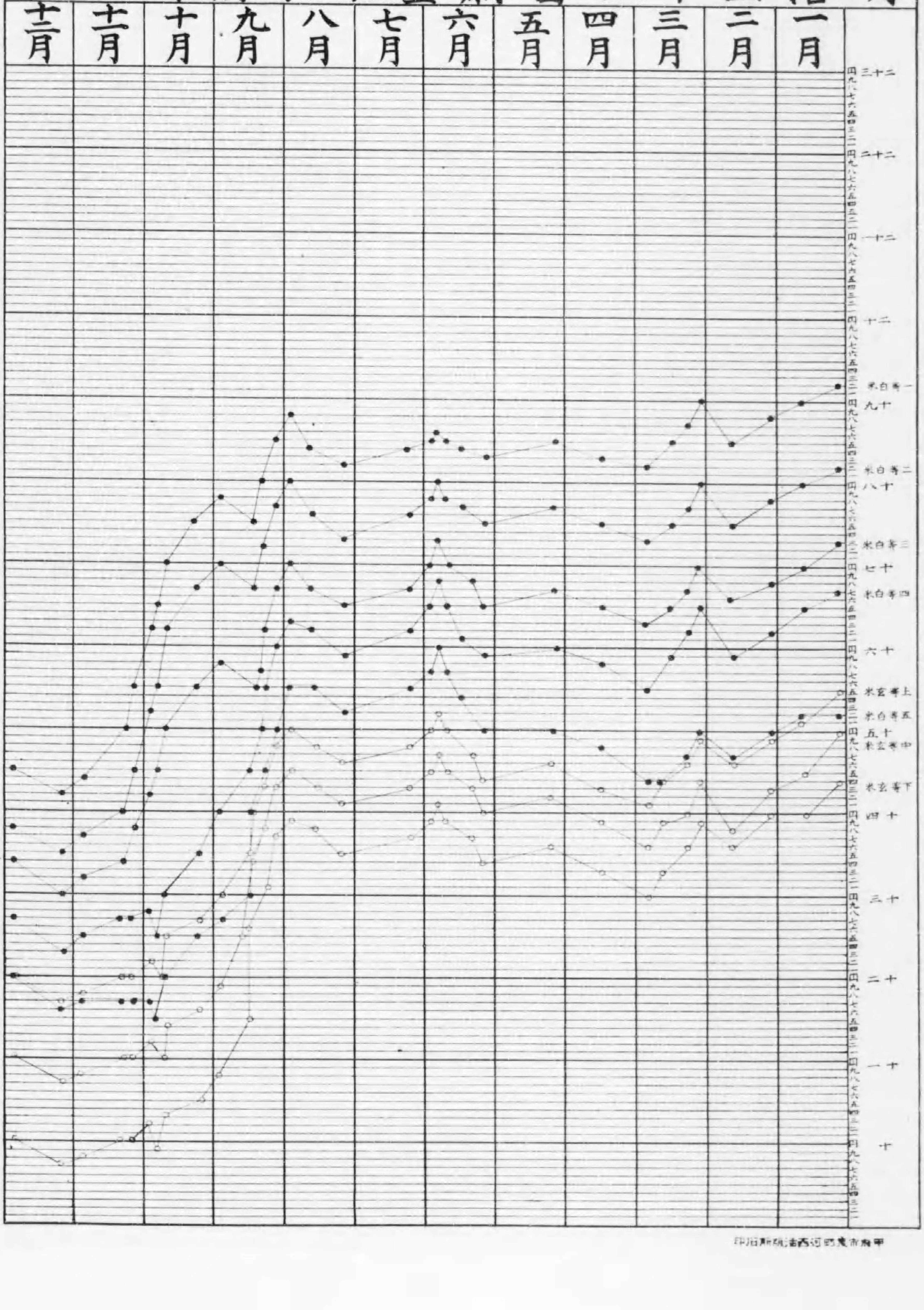


明治四十一歲中壹石米價高低表



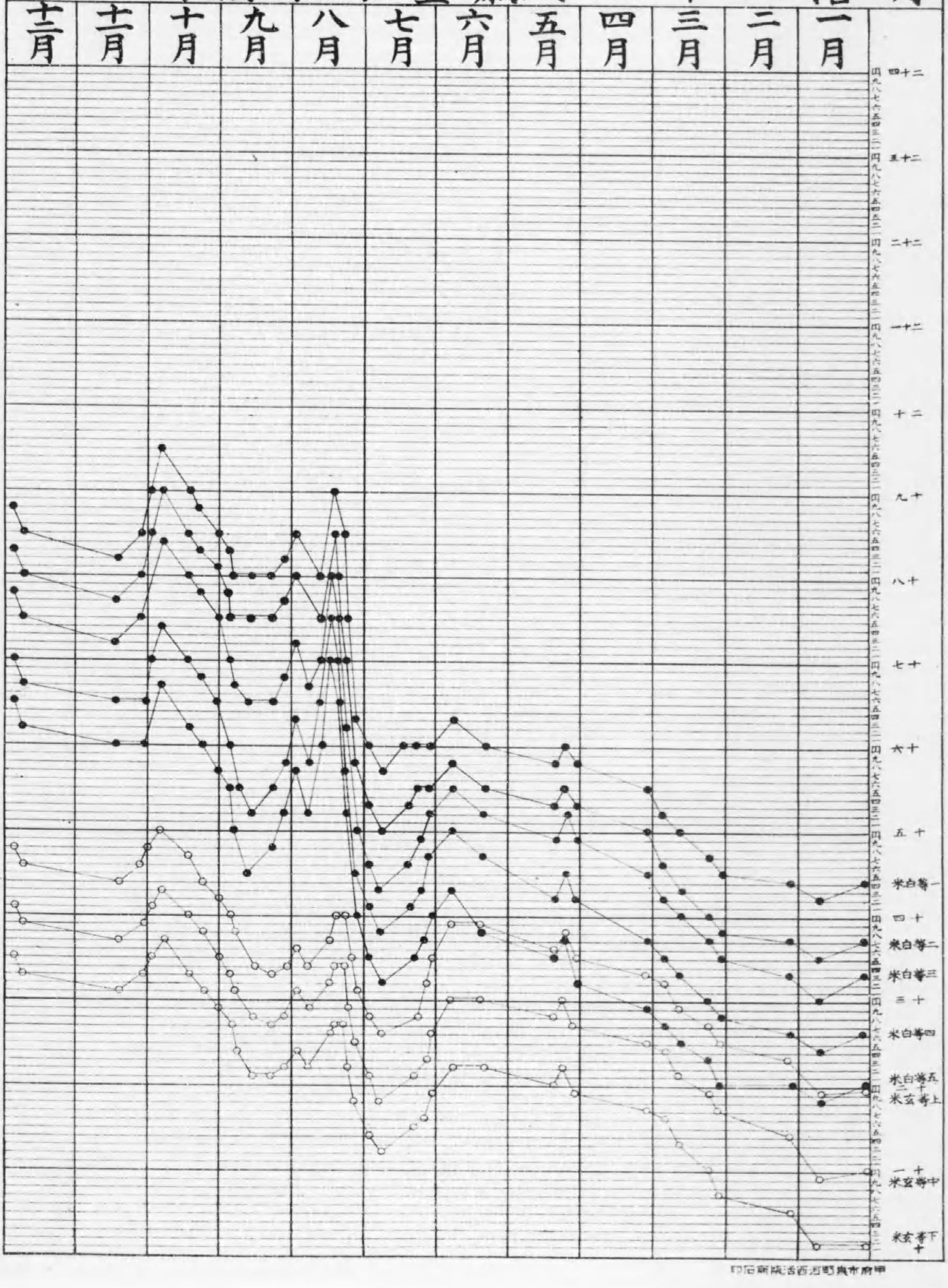
甲府市魚町西河活版所印刷

明治四十二酉歳壹石米價高低表



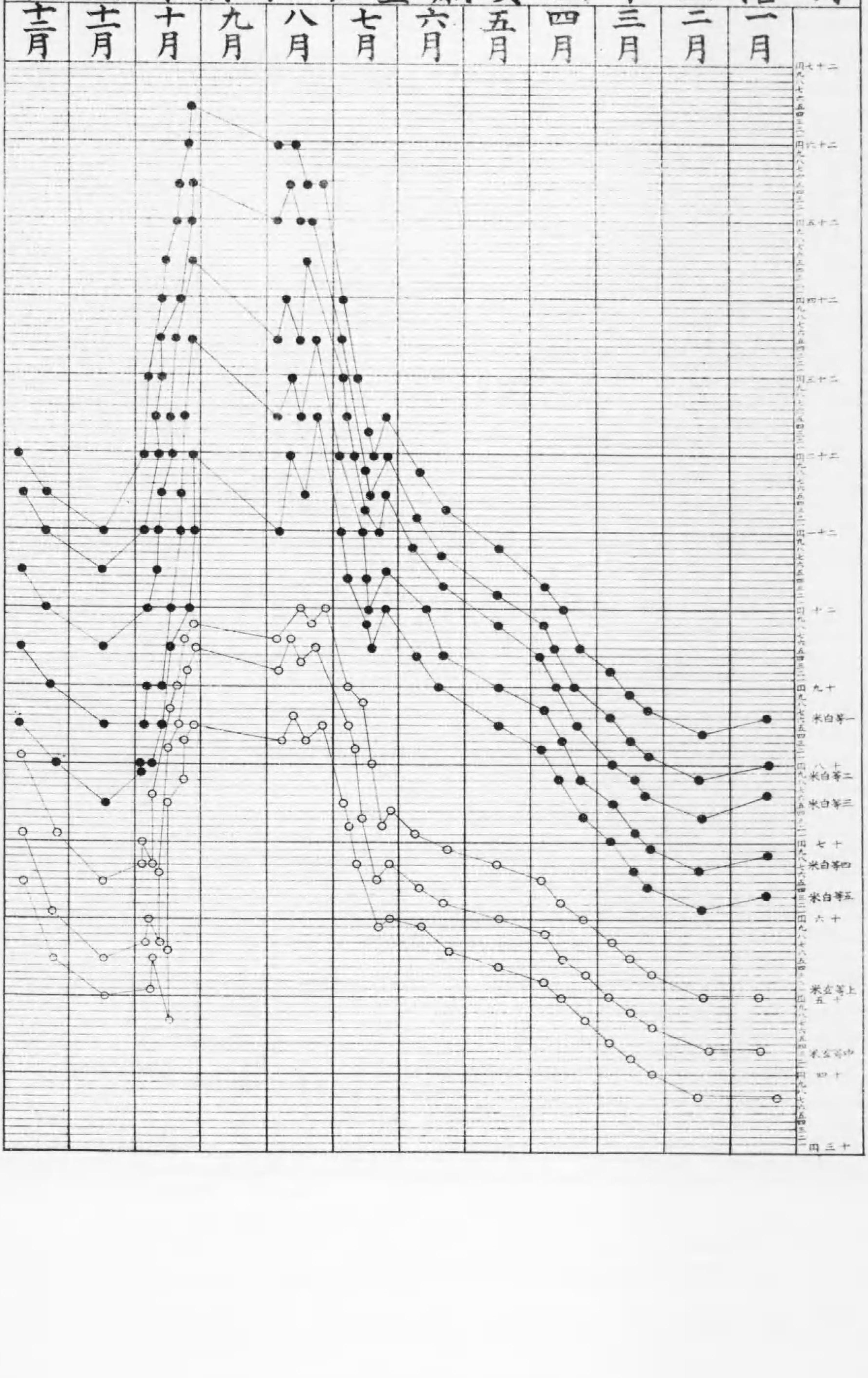
甲府市魚町河西活版所印刷

明治四十三戌歳壹石米價高低表

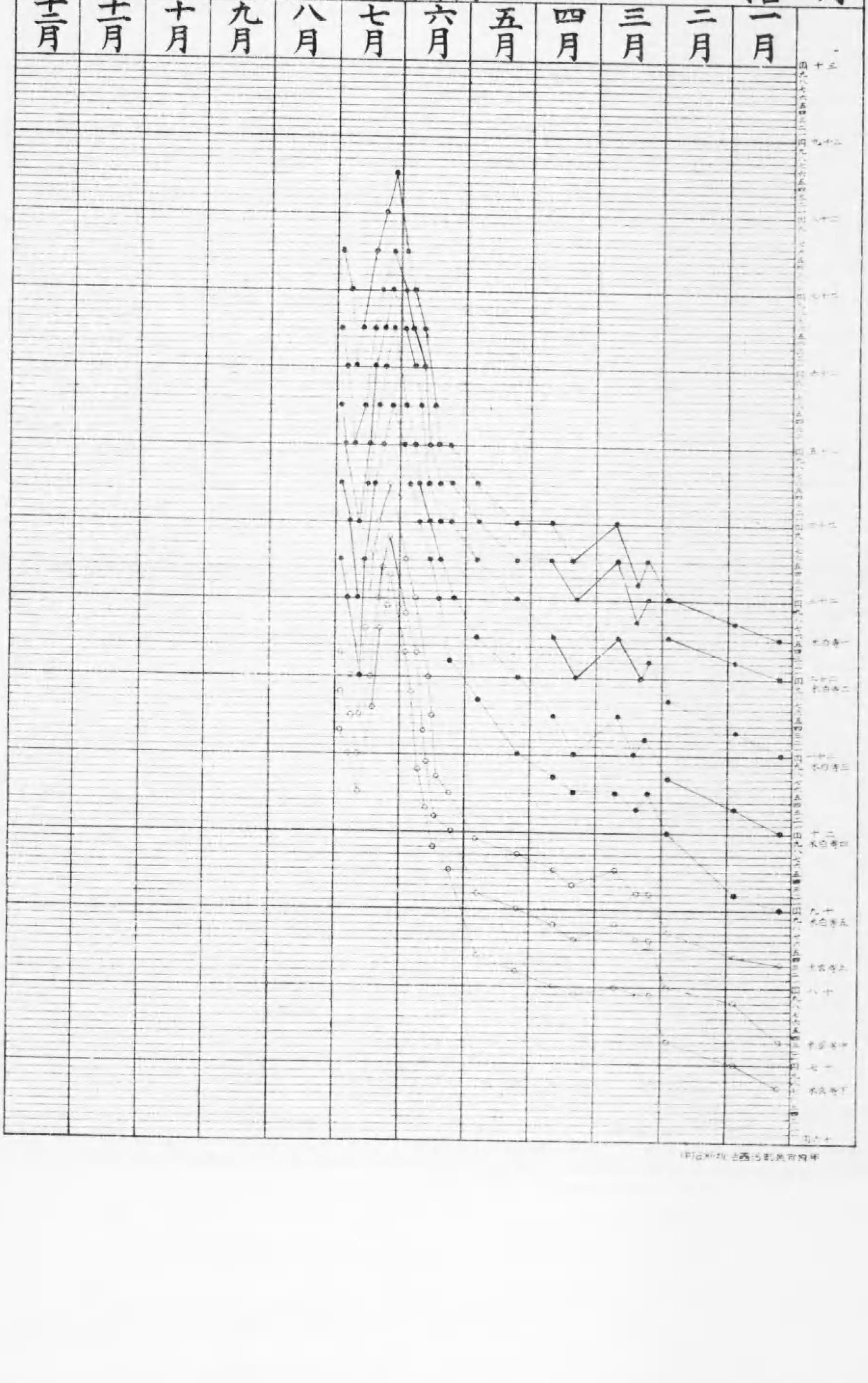


甲府市魚町河西活版所石印

明治四十四亥歳壹石米價高低表



明治四十五子歳壹石米價高低表



東京米價高低表

一毎年一月及十二月の平均と其間の月平均の高低を示す

年	全國産米額
元年	
二年	
三年	
四年	
五年	
六年	
七年	
八年	
九年	二四、七四三、七九一石
十年	二六、五九九、一八一石
十一年	二五、二八二、五四〇石
十二年	三二、四一八、九二四石
十三年	三一、三五九、三三六石
十四年	二九、九七一、三八三石
十五年	三〇、六九二、三二七石
十六年	三〇、六七一、四九二石
十七年	二六、三四九、八八三石
十八年	三四、一五八、一六九石
十九年	三七、一九一、四二四石
二十年	三九、九九九、九九九石
廿一年	三八、六四五、五八三石
廿二年	三三、〇〇七、五六六石
廿三年	四三、〇三七、八〇九石
廿四年	三八、一二三、五四八石
廿五年	四一、三七八、九五六石
廿六年	三七、一九九、六六三石
廿七年	四一、八六五、八九六石
廿八年	三九、九二〇、八八二石
廿九年	三六、一九九、七七一石
三十年	三三、〇〇一、〇一五石
卅一年	四七、三八七、六六六石
卅二年	三九、五八六、七六九石
卅三年	四一、四六六、四二二石
卅四年	四六、九一四、四三四石
卅五年	三六、九三二、二六六石
卅六年	四六、四七三、二九八石
卅七年	五一、四三〇、二二一石
卅八年	三八、一七二、五〇六石
卅九年	四六、三〇二、五三〇石
四十年	四九、〇四三、八〇二石
四十一年	五一、九三二、八三一石
四十二年	五二、四二三、九七九石

米價之概況

明治元年に於ける江戸の米價は平均壹石六圓ありしも安直は三圓七十錢にして之を慶應二三年の壹石六圓乃至七圓に比すれば殆と半價の下落あり蓋し慶應年間は國内騷擾人心堵に安んせず産業萎靡し米穀の生産力も大に減退したるが上に當時諸候は糧米の用意として津出しを禁したるもあり殊に運輸の途絶へたる等の支障よりして江戸の相場は比較上割高なりしも彼の維新政變の秋に至り總て物品は賣却して金に換へ置くの安全に如かずと云ふの人氣となり自然米の供給多きに過ぎ隨て價位も亦格安（明治元年）となれり然るに同年は雨天勝にて意外の凶作に加ふるに紙幣の發行あり次て戰亂治まり維新の大業漸く緒に就き民間の景氣頓に回復したれば需用頻りに增加して供給不足を感じ ●明治二三年の交には十圓臺に暴騰したり然るに當時外國商人の或る者は内地の米價と貨幣の割合不均衡あるに乘し彼の南京米と稱ふる外國米を輸入し我國の貨幣を輸出する者多く其交易のみにても壹千九百萬圓の巨額に達し加ふるに同三年の豐作と外國米の影響とにて ●四年の平均五圓六十三錢なりしも年末には三圓八十錢と劇落し ●翌五年には政府は幕府より引繼ぎたる籾倉（小菅、御竹倉、美倉橋）を開きて數萬石及各見附（城門）に貯藏したる軍用糯の拂下げあり市況頗る不振を極め翌年上半季に渉り相場は概ね三圓臺に居据れり ●同六年に地租を金納に改正せられ之と同時に政府は三井小野組等をして各地に米を買入れしめ他方に海外輸出の禁を解き以て米價の下落を豫防するに努めたるより平均四圓八十錢を維持し得たり超て ●同七年は佐賀の亂に次で臺灣の役あり米價は忽ち八圓廿錢に騰貴し ●翌八年には家祿奉還金下附の影響にて猶高價を保ちたりと雖とも畢竟右等の爲めに至て一時の需用を增加したるものにして眞個需給の變化より來りたる騰貴にあらざれば久しからずして又下落の歩調を示すに至れり此時に方り彼の地租改正の影響も加はり ●明治九年より ●十年に渉りて米價は五圓内外に降り當時地方の金融緊縮し地租上納季節に至れば運輸不便の地方は二圓臺の取引さへあるに及べり茲に於て政府は地租を百分の貳歩五厘に低減し地租納金抵當米法を設け預米規則を發布し或は常平法を設けて政府自から地方に米を買入る等百方價格の維持に盡したると米價も亦自然の回復期に向はんとするに當り西南の亂紙幣增發等より米價は遽りに奔騰して ●十一年は平均六圓五十錢となり ●十二年は平均八圓に上り（此年十月々尾深川倉庫在米僅に四萬俵内外にて平均相場九圓なりし）遂に ●十三年十二月に於て十二圓五十錢と云へる未曾有の高位を唱へたり是に於てか往きに相場の維持に努めたりし政府は常平倉を開きて賣出し或は定期米の市場を停止し强て下米建の賣買を爲さしめ呼直を低からしむる等專ら米價の昂騰を制止せんとせしも奏効遂に空しかりき然するに紙幣下落（銀貨百圓に付き紙幣百八拾五圓）の反響と地租金納以來米は全く農家の自由に歸し自ら消費額の增加を來したる結果に外ならず而して又通貨に銀紙の差ありて米價の呼聲を貴からしめたるに因ると雖ども當時農家の生計程度は著く高まり爲めに好景氣を觀めしたるが皆は通貨の關係より來りたる一時の變態に過ぎざれば爾後諸物價の平準を得るに隨ひ米價漸く下落の傾向を現はし遂に農家の金融は再び非常に逼迫して地方の賣米を誘致し ●十六七年の交には殆んど四圓の低位を示すに至れり然るに ●十七年の凶作にて ●十八年には七圓内外に回復したりと雖ども是より先き兌換銀券發行の準備として金札引換公債に大藏省證券の發行あり紙幣の引上げ急にして遂に銀紙の差全く平位に復すると共に米價及總ての物價下落し殊に地方の困難は年一年に甚しきを加へ往々土地さへ賣却するものあるに至れり此の時に方り ●十九年の大豐作は勢ひ多くの米を賣却せしめたるは勿論又一方に在ては年々米價の下落と兌換制度とに促されて退久しく共貯したる地方の備荒貯蓄米も時を同じくして售拂ひ之を公債證書等に代へたるもの頗る多かりしかば供給過多の結果として ●廿一年には四圓七十錢迄低落し或地方の如き二圓臺を示したりき此故に生産力は衰退し需給の權衡を失したれど如此變調の永續すべき理なく相場は自然回復の道を求めつゝ遂に海外への輸出となり廿一年より廿二年に渉りて每年七百四拾萬圓の多きに達し一般の景氣も挽回して其の需用漸く增加せるに當り ●廿二年の不作は殊に其騰貴を促し遂に破竹の勢を以て沸騰し ●翌廿三年六月に至りて十二圓と云ふ突飛の市價を示し爲めに各地小民稍不穩の狀を呈するに及び政府は自から外國米を買入れ又は内國米の定期賣買に外國米の代用を命ずる等百方輸入を奬勵して米價の抑壓策を講せりと雖ども而かも定期市場に於ける外國米の代用は恰も内國米の定期取引を禁止したると一般反て需給の投合を失ひ依然高直を維持したるのみならず過多の外國米を輸入したる結果は海外貿易に於て輸入の超過貳千五百萬圓となり續て經濟市場に恐慌を來し民設鐵道買上論を唱へて世界救濟の急を唱ふるすあるに至れり幸に此年の米作非常の [illegible] 六年は七圓乃至八圓の相場にて市場漸く平穩なるを得たり夫れ斯の如く明治の初めに在ては米價も亦維新政變の波動を受くるを禁せず勢ひの免かれざる所なれども爾後の廿年間に於ける浮沈の激動は主として商政の失當に起因せずんばあらず蓋し經濟思想の幼稚なりしが故にして即ち運輸金融等の機關備はらざるに米納を金納に改め米價下落して後ち預り米の規則或は常平法を設け人爲を以て米價を支配せんとし無職の士族に公債證書を一時に下附し紙幣を增發し又俄かに收縮し。定期米の公共市場を停止し米商會所條例を改正して禁止的の重税を課し其取引に官吏の立會を命じ日本米の取引に外國米を代用せしめ内國米の需給者を驅逐し其相場機關を破壞し政府自から外國米を輸入し一旦廢止したる常平法を復する等頻りに苦心焦慮せしと雖ども其結果は反て一般商業の發達を害する所以を悟らず上下與に五里霧中に在りて米價騰落の理を論議したる當時を想へば只笑止と云ふの外なき有樣なりし、其後政府の干渉漸く薄らぎ經濟市場も漸次に回復し運輸交通の業益發達するに隨ひ米の消費も共に增加しつゝありしに恰も廿六年の米麥の不作は銀貨の低落と相俟て米價の昂騰を促し ●廿七年の日清事件は一層其度を高むるの動機となりしが戰爭の當時は自から勤儉貯蓄の念を生ぜしめたると軍費募集等の影響に加ふるに此年の豐稔にて騰貴の勢ひを挫折せられ ●廿八年は當年の氣配を受け極めて平穩なる景況なりしに連戰連勝終に馬關條約を締結するに及んで一般の事業は非常の勢ひにて膨脹せしかば米の需用も俄かに增加せりと雖ども ●廿九年は金貨本位を實施せられ世論は之れが爲めに米價下落を豫期したり然るに仝年及 ●三十年の不作は米價の騰貴に著しき速力を加へ ●三十一年八月に於て遂に十七圓六十八錢と云ふ空前の高價を現はすに至れり此年又政府は廿三年の如く日本米の取引に外國米を代用せしめたるが故に外米の輸入頻りに加はり取引所は外國米の市場と化し日本米の狀況は殆んど暗黑となりたるより人々疑惧の念を生じ大に供給を澁滯し反て一層奔騰の勢を助長せしめたり而して幣政改革後物價下落の豫想も事實は之に反して益騰貴せり然るに當年の秋收大豐作と前年來暴騰の反動にて ●三十二年八月には九圓内外に迄暴落したり仝年の米作公報は平年作なりしも其目減收を唱ふるもの多く隨て市價漸く昇進し ●三十三年二月には十三圓臺となりしが土用後は稀なる天順にして既に其筋の調査は一割以上の增收と豫報せられたれば一時十圓五十錢迄引落したり然れども土用前の不氣候は實收に迨んで反て幾分の減收を生じ爲に相場は稍回復せんとするの時に向ひ偶々財界の悲境一般商業の不景氣は自から米市場をして不振ならしめたりしも戰後米の需用益加はり ●三十四年には十五圓臺に沸騰し地方の在米缺乏して東京大坂を始め各地の定期市場に恐慌を起し賣買中止の不得止に至れり而して秋收は稔を告ぐるに及んで氣配忽ち一變し ●三十五年に至り十一圓内外に暴落したりしが此年不幸にして米麥ともに減收したると下落の反動とに依り玆に又騰貴を餘儀なくし ●三十六年の麥作減收が副因となりて遂に十六圓以上に暴騰せり玆に於て大に外國米の輸入を促し其額凡五百萬石の多きに達し而かも氣候の不順に定期の相場は早くも下鞘を示し以て下落を豫告したりしが此秋果して豐作なりしより益下落せしも十二圓臺にて纔に底止し稍回復の曙光を見て ●三拾七年に入れり同年は對露の大戰役あり所謂戰爭米高の氣配なりしも金融に運輸に非常の打擊を蒙り商業自から萎縮し外國米は海關税の增率を見越して約六百萬石の巨額を輸入せり而して内地の作況は無前の大豐穰なりし故に米市場は存外靜穩にして十四圓臺より十二圓臺の間に往來し ●翌三十八年上半季までは尙多少の下落を見たり然れ共前述の如く外國米の輸入連年驚くべき額に達したるに不拘内地米の價格に直接の影響を與へざりしものは念ふに外國米は内地米常食者以外に需用せらるゝもの多きに居るが故にして而かも戰爭の打擊は一時の假需用を滅せしに不過して消費額には何等の影響あらざりし而已ならず當時麥は戰地の需用と當年の劣作とに依り米價以上（精米と搗麥の比較）に沸騰したれば自から米の消費を增加せしめ遂に日本海に於ける敵艦全滅の報傳はるに及んで（同年五月）一般商界とゝもに勃然として米市場の景況もまた活動し消費と假需用とを問はず頗る買人氣となり供給常に不足を感ずるに際し偶々秋收の不良を氣に構へ相場は頻りに上騰し殊に定期の如きは每に大上鞘を以て先驅し年末に於ける正米の直段は十四圓内外にして定期先物は十五圓五十錢なりき ●三十九年は戰捷の餘勢を受け或は商工業の膨脹に誘はれ金融の緩慢なるに乘じ投機的の取引盛んに行はれ現に東京の定期市場には過度の買思惑（五月期の賣買取組高百數十萬石）に達し其受渡高三十八萬千八百五十石の巨額に上る）を企て相場外の相場を呈したる爲め反て供給餘裕を生じ多少の波瀾は免かれざりしも正米に及ぼしたる影響は極めて少かりし時に秋收豐穰なりしも端界時に於ける地方の在米殆んど拂底し新米の需用急を告げ頗る上景氣を露し所謂沖天の勢を以て昇騰し遂に ●四十年九月に至り十八圓となり上米は十九圓乃至二十圓と云ふ空前の高價を現したり然るに全國の作柄稍豐況を告げ定期先物は非常の下鞘を以てしたれば需用自から減少するに反し新米を早出しするもの又は僅に殘存する古米の底を拂はんとするの勢ひ甚急に剩さへ内外財界の恐慌は米市場を打擊して流石に强硬なりし氣配も玆に漸く挫折し十四圓八十錢となり ●四十一年一月平均直段十五圓五十錢なりしが頻りに昂騰して八月には十七圓三十錢となれり然るに全國豐作の說專ら高く急轉直下十二月には十三圓八十錢に崩落したり ●四十二年一月平均直段十三圓九十錢にて八月に至る迄格別の波瀾なく至て平靜の商狀なりしが厄日も全國無事にて稻作の出來榮へ近年比類なく大豐作說に氣崩し一瀉千里の勢にて十二月には十一圓二十錢と下落するに至れり、是に據りて之を觀れば米價は概して作の豐凶に支配せられつゝ周圍の事狀に由て漸進的騰貴を來し遂に今日に至れるものなるを知る米價の前途亦察するに足らんか要するに明治初年の安直を四十年の高直に比すれば五倍以上の騰貴にして而かも昔日運輸不便なりし地方に在りては實に六倍乃至七倍の增價なるを以て到底單に比較計算の及ばざる所なり斯る騰貴を致したるものは「貨幣制度の變革に依りて自から其呼價を騰貴せしめたること、徴兵令と交通機關の發達と相待つて地方に米食者の增加を來たし產額之に伴はざること」等は主たる原因ならん就中日清戰役後に於ける騰貴の著しきものは財界の膨脹に伴ふ結果に外ならざるべし。

303
800

大正元年八月二十六日印刷
大正元年九月三日發行

正價金壹圓五拾錢

編輯兼發行人　甲府市穴切町貳百拾參番地　田草川喜平次
印刷者　甲府市泉町六十二番地　河西熊三郎
發行所　甲府市春日町廿一番地　輿石榮次郎
印刷所　甲府市泉町六十二番地　河西活版石版印刷所

終